

はしがき

本書は、社会福祉士、精神保健福祉士養成教育カリキュラム「現代社会と福祉」の参考書である。この「現代社会と福祉」という科目は、以前は「社会福祉原論」として編成されていたものである。そのこととの関係で、副題を「社会福祉原論」とした。

「現代社会と福祉」という科目は、社会福祉士や精神保健福祉士を目指す学生たちの基礎的な科目として1年次に設定されており、社会福祉についての基本を理解するための重要な科目であると位置づけられている。それにもかかわらず、学生からは「この科目は難解」であるとして、実はあまり評判が良くない。社会福祉士養成のテキストは、ともすれば既存の制度の解説を中心に構成されがちであり、特にこの「現代社会と福祉」については、抽象的な理論や制度解説の羅列に終始してしまいがちである。そのようなことから、初学者の実感として、「福祉とは何か」ということが真に迫ってきづらいテキストも数多くみられた。このような編者たちの素朴な気持ちと、「何とかならないのか」という欲求が本書の作成につながった。

では、どのように工夫すれば、「現代社会と福祉」が実践とつながる「生き生きとした」興味ある科目と捉えられるのであろうか。さらに、主体的な学習を促すものになるのであろうか。このような素朴な「問い」に対しての「答え」として、本書では3つの工夫をこらした。

1つ目は、各章の導入部分として「社会保障の時事問題」を織り込んだことである。ここでは各章での主要課題につながる新聞記事をピックアップし、そこから課題点を浮き彫りにし、読者が興味をもって問題に取り組めるように工夫した。読者はここから、「現代社会と福祉」において何を問題として捉えなければならないかを、編者たちと一緒に考えてほしい。なお、新聞記事のトピックスは、最新のものばかりでなく、古いものも取り上げている。過去の社

会保障の経緯を知ること、現在の社会保障を冷静な目で捉えるよい契機となるはずである。

2つ目の工夫は、各章の3節に、社会福祉士・精神保健福祉士の「現代社会と福祉（社会福祉原論）」の範囲を念頭において、国家試験の過去問題の解説を行ったことである。通常、国家試験の過去問題の解説は、いわゆる〇×式で「覚えなさい」という形になっており、「これがなぜ正答とされるのか」や「この問題を問う背景にはどのようなことが課題となっているのか」という論理や道筋がさほど重視されていないように思われる。ひよっとすれば、このことが「現代社会と福祉」という科目を、あまり興味の持てない科目にしているのかもしれない。その点を踏まえて、本書は解答に至るまでの道筋を、読者と一緒にとどってみようというスタイルで、国家試験問題の解説を行うように試みている。

3つ目は、本書が「学者」と「専門職・実践者」とのコラボレーションで創りだされた本であるということである。本書の各章は、第1・4節を「研究者」が担当し、第2・3節を「若手の研究者や専門職・実践者」が執筆するという構成を原則としている。従来、社会福祉士・精神保健福祉士のカリキュラムテキストは、研究者が執筆するパターンが多くみられた。本書は、その点であえて違う形をとったのである。編者たちの思いとしてあるのは、社会福祉での「理論と実践の対話」がきちんとなされなければ、社会福祉の現場での試みも実り多いものとならないし、研究者の掲げる理論も陳腐なものとなるというものである。そのようなことから、理論は理論、実践は実践と分離するのではなく、両者の「対話と融和を通じて発展を目指すべきだ」と日頃から考えておられる方々に、執筆の労をとっていただいた。1つの章を、ペアを組んだ2名で執筆をすることによって、本書が「理論と実践の対話」を具体化した「作品」となり、タイトルが示すような『チャレンジ…』となったといえよう。読者にとっても本書を読み進めることで、様々なことを深く考えるという『チャレンジ…』の扉を開いてほしい。

福祉系専門学校・大学のカリキュラムのなかでは、専門科目の学習を深め、

現場実習も経験した後、国家試験対策を本格的に始める3年次あるいは4年次に、1年で学んだはずの「現代社会と福祉（社会福祉原論）」に、もう一度、チャレンジすることもあるだろう。その意味で、読者が学んできた理論と実践をうまく整理するための振り返りとして、本書が参考書として有用ではないかと思う。ぜひ活用していただきたい。

なお本書の執筆陣は、放送大学教養学部大曾根寛教授に縁の深い者で構成されている。大曾根教授自身がかねてから、社会福祉における「理論と実践の対話」を常に意識・実践されていることから、各章の第1節と第4節の執筆者はその思いを同じくする大学教員が担当した。そして、第2節と第3節は、主に大曾根教授が放送大学大学院で指導された修士課程の修了者と、久塚が指導している若手研究者により執筆されている。

なお本書の執筆の課程で、大曾根寛教授は還暦を迎えられた。その意味で、大曾根教授への還暦祝いとして、本書を捧げたい。

最後になったが、ご多忙の中、快く執筆をお引き受けいただき玉稿をお寄せ下さった執筆者各位に、この場を借りて御礼申し上げる。また法律文化社の小西英央氏、事務局を担ってくださった志賀一彦氏には、企画の段階から最後の原稿の取りまとめにいたるまで、多大なご苦勞をおかけすることになった。両氏に改めて御礼を申し上げたい。

社会福祉に関する理解を深める営みに、本書が少しでも役立つなら、編者にとってこれほど嬉しいことはない。なお本書は参考書であるので、従来のテキストと合わせながら読み進めることをお勧めするが、読者の皆様からのご意見をいただければ幸いである。

2012年3月

編者を代表して 久塚 純一